

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 18 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370527

研究課題名(和文) 日本語の自動詞構文と意味に関する研究

研究課題名(英文) Study on meaning of the Japanese intransitive construction

研究代表者

福島 みどり(天野みどり)(AMANO, Midori)

大妻女子大学・文学部・教授

研究者番号：10201899

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：「構文」という言わば文の鑄型に関する知識を私たちは身につけており、その知識を駆使して、実際の文の意味理解や文の生成は行われているものと考えられる。本研究は、自動詞構文のうち変化自動詞を述語とする特定の構文を考察の対象とし、その構文の典型的な特徴を何らかの点で逸脱している文の意味解釈に関する調査を行った。その結果、母語話者は、文脈上の特徴を捉えて推論を加え、その構文に属するものと見立てることが可能であり、調整的に意味解釈するものであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： We have several knowledge about the meaning of the constructions, namely the abstract meaning of the specific sentence types, and by making full use of that, understand the meaning of the actual sentences.

In this study, we considered the intransitive construction mainly. We investigated several sentences with the feature which deviated from noam of the intransitive construction. As a result, it became clear that native speakers catch the various appropriate constructive features on the context, infer that the strange sentence belongs to the specific intransitive construction hypothetically, and interpret the meaning of the deviating sentence adjustably.

研究分野：日本語学

キーワード：構文 接続助詞 のが それが 意味拡張 構文的意味 変化自動詞 逸脱文

1. 研究開始当初の背景

(1) 理論的背景

近年、構文のゲシュタルト性に注目し、構文に慣習的に結びついた意味を分析する研究が、Goldberg (1995) などの構文文法をはじめ欧米を中心とした言語学分野で多く行われている。しかし、これらは大半が英語を分析対象とするものであり、そのデータから構築された理論は、構造の異なる言語によっても検証されなければならないものである。

日本語学の分野でも、従来補助動詞構文、「言いさし」の現象など、特定の文類型における慣習的な意味の定着に関する研究がなされており、本研究の代表者も、構文に関する知識が実際の文の意味生成・理解に重要な役割を果たすことを日本語の実例分析により主張してきた。

このような研究の流れの中で、英語を対象とした構文研究の成果と比べつつ、日本語の構文研究をさらに進め、言語の普遍性や個別性に関わる主張を吟味していく必要がある。

また、実際の文脈や状況に応じた、文の意味生成・理解の過程の究明という点では、文だけを切り離して考察する文法論の分野を超え、語用論研究の成果を参照していくことも必要である。例えば関連性理論の分野ではカールソンらが語用論的推論のパターンを4種挙げるなど、有用な理論的枠組みを提案している。ただし、これらの研究もまた英語を分析対象とするものであり、その枠組みで日本語の文の意味解釈や、文脈に応じた推論をうまく説明できるかに関し、検証の必要がある。

(2) 逸脱的文を対象とした研究についての背景

本研究の特徴は、逸脱的特徴を持つ文を積極的に考察対象として取り上げ、逸脱的でありながらも意味理解できるのかを明らかにしていく点にある。

これまでの日本語文法論では、こうした研究手法を用いるものはそれほど多くなかったが、近年、「破格構文」「非規範文」などの名称で分析される例が見受けられるようになった。

構文研究の流れの中では、こうした逸脱文の分析は、慣習化された構文が拡張し、基本的意味から派生的意味へとさらなる構文化が進んでいる変化現象として捉えることが可能である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、構文という単位の持つ類型的な意味に関する文法的知識が、実際の言語使用における意味生成・理解のプロセスにおいて重要な役割を果たすということ、日本語文法論の立場から論じることである。その特徴は、逸脱的特徴を持つ実際の言語使用例を分析対象とすることにある。この手法に

より、実際の言語使用場面における母語話者の柔軟な言語能力の一端を明らかにする。

具体的には、日本語の自動詞構文や名詞述語構文など、主格成分「～ガ」と述語句からなる「Xガ述語」構文を考察対象とし、その拡張された意味を明らかにすること、逸脱的特徴を持つ場合には所属する構文の基本的意味と整合するように意味解釈されることを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、現代日本語の自動詞述語構文を分析し、構文の重要性を論じることが主要な目的である。そのために以下の研究を計画した。言語一般の構文の役割に関する理論的考察の側面と、現代日本語の自動詞述語構文の意味をデータに基づき明らかにする記述的側面の両面を、バランスよく行っていくことを目標とした。

(1) 逸脱的特徴を持つ自動詞述語文の実例を多数収集し、その構文の意味を明らかにする。既存のコーパスや書き言葉資料によるだけでなく、自然会話の文字化資料を作成し実例を収集する。

(2) 逸脱的特徴を持つ自動詞述語文の実例について、許容度調査を行い、許容度を左右する要因を明らかにする。

(3) 逸脱的な自動詞述語文を変化の側面から考察するため、中古期の「準体句ガ」を調査する。

(4) 現代日本語の自動詞述語構文の多様性を考察する。

(5) 言語一般の「構文」の役割に関する理論的考察を行う。

4. 研究成果

(1) 逸脱的な「のが」文の考察

現代日本語に状態変化自動詞を述語とした《サマ主格変遷構文》が存在することを指摘し、この構文がベースとなり、一見異なる2つの構文のように見えるいわゆる「のが」型の主要部内在型関係節文と接続助詞的な「のが」節文とが、いずれも「のが」型の《サマ主格変遷構文》であることを示した。特に逸脱的特徴を持つ「のが」節文の場合、《サマ主格変遷構文》の意味が類推拡張されることにより成り立つものであることを示した。

「のが」型の《サマ主格変遷構文》は、「のが」節事態と主節事態の2つの事態の推移を、1つの変遷イベントとして表す。Kuroda (1992) は主要部内在型関係節文の成立に関連性条件が必要であると述べ、2つの事態に関して「one superordinate event」の意味があると述べているが、本研究の立場で言えば、「のが」型の主要部内在型関係節文は、1つの変遷イベントという上位イベントの意味があるということになる。変遷イベントには変遷イベントの所有者の存在が前提

とされるが、その言語的表出は任意である。変遷イベントの所有者が「のが」節内に顕在する場合にそれを「主要部」と解釈してきたに過ぎない。

従来、「のが」型の主要部内在型関係節文について、その「のが」は主要部が内在する関係節であるとか副詞節であるなどとされてきたが、本研究は、「のが」全体でサマ主格を表す節であると主張した。従来「関係節説」では説明できない現象として、a 内在型関係節と外在型関係節の意味の違い、b 主要部が存在しない現象、c 主要部が複数の項に分かれている、いわゆる分離軸現象、d 主節に「それが」などの指示詞が「のが」と重複して顕現する現象、e 主節述語句から予測される格が「が格」ではなく、「のが」と不一致である現象がある。これらも、「のが」がサマ主格だとすればうまく説明できる。また、従来「副詞節説」では説明できない現象として、「のが」と「のに・ので・のを」との意味的な違いや、「のが」節文は許容度が安定しないのに「のに・ので」は安定しているという違いがある。これらも、「のが」が《サマ主格変遷構文》に属する文であり、この構文の意味を表すこと、「のに・ので」とは異なり、格として機能していると考えれば、うまく説明できる。

「のが」型の《サマ主格変遷構文》には許容度の高いものから低いものまである。この許容度の低さは、当該の「のが」節をサマ主格と解釈したり、当該の主節述語句を状態変化の意味に解釈したりと、推論による補完的解釈を施していることの反映である。こうした許容度の低い現象の存在は、大きな流れの中で見れば、当該の「のが」が、「のに」や「ので」のように接続助詞化する途上にあることを示すのかもしれない。しかし、もはや「のに」「ので」節を格助詞の「に」「で」の意味に解釈したり、その主節述語句を格助詞「に」「で」と結びつくものに変容解釈したりする必要がなく、文の許容度も安定していることと比べてみれば、現段階の「のが」は接続助詞化した「のに」「ので」とは異なり、主格「が」の意味を存続させている段階にあると言わなければならない。

(2) 接続詞的「それが」文の考察

接続詞的「それが」文の実例を観察し、前文で表される状態から「それが」の後文で表される異なる状態に変化する意味を表すことを見た。この意味は《サマ主格変遷構文》に属する接続助詞的「のが」文と共通するものであり、接続詞的「それが」は接続詞「が・だが」の成立とは別に接続助詞的な「のが」の使用法に触発されて拡張的に成立したものと位置付けることができる。接続詞的「それが」の意味は主格「が」の意味を淵源としつつも主格よりも広範な述語句との統合を可能にし、特に対話文脈においては、相手の発話から推論により想定を設定する点、また

その想定と異なる事態を述べることの前触れ表現として慣習化し後続を顕現させない点など、一層拡張的であることが認められた。

(3) 逸脱的な文の許容度と意味解釈

母語話者の言語運用は柔軟なものであり、規範から逸脱し不自然さを感じるような言語表現であってもその意味がどのようなものであるかを理解することができる。それはなぜかを考察した。

本研究では実際に現れる逸脱文の考察、日本語母語話者と非日本語母語話者（日本語学習者）に対する意味解釈調査を通し、意味を解釈するとはどのようなことなのかを日本語文法論の立場から考えた。

第1に、逸脱的な特徴を持つ「のが」文と「それが」文の中断節を課題文とし、その後続にどのような表現が続くと予測するかを日本語母語話者と非日本語母語話者を対象に調査した。その結果、《サマ主格変遷構文》の特徴を文脈的に持つ中断節の場合には、「のが」文も「それが」文も日本語母語話者のみが逆説的な後続展開の予測に集中した。例えば、「それが」の意味は指示語「それ」+主格助詞「が」の合成として解釈できたとしても、質問文+「それが」文という形式全体に固着した「推論により想定される認識状態から現実状態への変遷」という慣習の意味や、その意味の叙述による間接的な否定的応答という慣習の意味を知らなければ、後続を逆展開的に予測することは困難であることを示している。

第2に、逸脱的な特徴を持つ「のが」文と「それが」文の意味を、言い換えたり補足したりして母語で説明する課題に関し、日本語母語話者と非日本語母語話者とで違いがあるかどうか調査した。

その結果、日本語母語話者は構文の知識を利用して逸脱的な文の調整的意味解釈を行うこと、これまでの研究で同じように逸脱的としてきた「それが」文と「のが」文でも、母語話者の調整的意味解釈の度合いに異なりがあることがわかった。より逸脱感が強い「のが」文の方が構文的意味を重ね合わせて意味解釈することが今回の調査からは読み取れた。

以上の2つの調査から、一連の言語形式とその形式全体に固定化した意味に関する知識、すなわち慣用的な「連鎖文類型」に関する知識が、逸脱的な発話の意味理解に一定の役割を果たすことが明らかになった。

文や連文の意味理解においては、それらを構成する個々の語に関する知識を足し合わせて全体の意味理解に至るだけではなく、「構文」や「連鎖文類型」という、1文や2文連鎖の固まりが持つ典型的意味を利用し、全体の意味を仮説的に理解していく過程もあると考えられる。

(4) まとめ

実際の文の中には、文を構成する個々の構成要素を順次足し合わせただけでは、文全体の意味を解釈することができない場合があり、むしろ、文全体の意味を「このような意味ではないか」と仮説的に予測し、その予測に見合うように個々の構成要素の意味を特定することさえある。この全体的な予測を可能にするのが、慣習により固定された、構文や連鎖文類型の意味に関する知識であるということ、本研究の結果、主張する。

日本語を分析対象とする本研究の成果は、人間言語の普遍性の問題として構文の役割を究明する研究にも、貢献する部分があるものと思われる。

(5) 今後の課題

本研究の計画段階では、中古期の「準体句ガ」も考察の対象とし、中古語から現代語までの長い期間における変化の中に現代語の逸脱的な「のが」文・「それが」文を位置付けることを考えていたが、許容度調査に加えて、母語話者と非日本語母語話者との比較調査を追加したために、歴史的調査は予備調査の段階で断念した。

本研究で明らかにした構文の拡張に関し、歴史的変化現象としてどのような意味づけが可能であるのかについては今後の課題としたい。

本研究により明らかになった逸脱的な自動詞構文に関する調査結果を、先行して行った逸脱的な他動詞構文に関する調査結果と合わせ、現代日本語の自他構文全体を再考することも、今後の課題として残されている。

<引用文献>

- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago : University of Chicago Press. (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田 優子訳 (2001) 『構文文法論 英語構文への認知的アプローチ』研究社)
Kuroda, S-Y (1992) *Japanese Syntax and Semantics*. Kluwer Academic.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

天野みどり (2015) 「益岡隆志著 『日本語構文意味論』」 『日本語の研究』11巻 1号 42-47 (査読無)

天野みどり (2014) 「サマ主格変遷構文の意味と類推拡張 - 「のが」型の主要部内在型関係節文と接続助詞的な「のが」文」 『表現学部紀要』(14) 27-40 (査読有)

〔学会発表〕(計4件)

天野みどり (2015.8.21) 「接続文の予測に

果たす「構文」の役割」 CAJLE 2015 年次大会, 会場: サイモン・フレーザー大学, (バンクーバー)

天野みどり (2015.7.18) 「発話の予測と構文 - 接続詞的「それが」を例に - 」 第14回対照言語行動学研究会, 会場: 青山学院大学 (東京)

天野みどり (2014.12.9) 「現代日本語の接続詞的表現 - 「それが」の文法化 - 」 第92回大妻女子大学国文学会例会, 会場: 大妻女子大学 (東京)

天野みどり (2013.10.12) 「サマ主格変遷構文の意味と類推拡張 - 様々な「のが」構文との関係 - 」 公開ワークショップ「構文と意味の広がり」, 会場: 和光大学 (東京)

〔図書〕(計5件)

天野みどり (2016) 「母語話者と非母語話者の逸脱文の意味解釈」(庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編) 『日本語研究のフロンティア』, くろしお出版, 127-144

天野みどり (2016) 「逸脱的「それが」文の意味解釈」(藤田耕司・西村義樹編) 『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』開拓社, 320-342.

天野みどり (2015) 「逸脱文の意味と推論 - 逸脱的な「のが」文の実例考察 - 」(加藤重広編) 『日本語語用論フォーラム』ひつじ書房, 101-122.

天野みどり (2015) 「格助詞から接続詞への拡張について 「が」「のが」「それが」」(阿部二郎・佐藤琢三・庵功雄編) 『文章・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版, 99-118.

天野みどり (2014) 「接続助詞的な「のが」の節の文」(益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦編) 『日本語複文構文の研究』ひつじ書房, 25-54.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福島みどり (天野みどり)

(AMANO, Midori)

大妻女子大学・文学部・教授

研究者番号: 10201899